

## 驟雨

博が初めて杉山幸子の前に現れたのは、昭和十八年の晩夏、幸子が小学四年生の時のことであった。

信州の夏休みは短い。旧盆が過ぎれば二三日で学校が始まる。寒い冬の休みが暖かい地方より長いことと、当時は春秋の「田植え休み」と「稲刈り休み」があったからであろう。

八月の下旬は、山国とは言えまだ日中の日差しは強い。しかし立秋は過ぎていることとて、日脚も縮み、はや秋の気配を感じさせる頃である。

「ただいまっ」

学校から帰って玄関に駆け込んで見ると、上がり口に見慣れぬ男女の下駄が揃えられていた。いつもなら居間にズックの掛け鞆を放り込んで、そのまま遊びに飛び出すところなのだが、一寸奥座敷を覗いて見た。

床の間を背に祖父の杉山隆一が、それは習い性になっているのだが、背筋をピンと張ってきちんと正座している。前を見ると霜降りの水色地に金ボタンの夏の学生服を着た中学生が同じように姿勢を正して座っていた。そしてその隣には白髪を束ねた日焼けした顔の老女が座っていた。その背も腰も曲がっていて、長年農業に携わって来た人であることは幸子にも一目で分かった。

台所に行くとお茶の用意をしている母の初子が

「今度、隠居の二階をお貸しするお兄ちゃんとおばあちゃんよ」

と言った。それが木原博と祖母のよねであった。

「ふうん」

と幸子は興味なげに隣の居間に鞆を投げ出して外に出たまだおやつの間までは一時間ほどある。幸子は、帰りしなに近所の女の子たちが石蹴りをしているのを見かけて、「仲間に入れて」と声をかけていたのだった。

湿気の少ない諏訪の町は、直射日光は厳しいものの日陰は涼しい。蠟石で道路に輪を描き、十番目の上がりまで自分の石を進めるその遊びは、交通事故の心配のなかった当時の子供たちに人気のあったものだった。幸子も加わっての賑やかな遊び声は、奥の座敷までも届いたことだろう。

杉山家は信州諏訪の旧甲州街道に面していた。隣は前年市制が敷かれたばかりの諏訪市役所であった。そこは北に手長ヶ丘を背負った市の中央であり、駅にも商店街にも近い。屋敷内の東北の隅には昔諏訪藩の殿様のお茶の水にしたという泉のある、こじんまりとした武家屋敷であった。それは幸子の曾祖父弥一が明治になって、町に移ってから手に入れたものであった。

庭には、大きな鯉や緋鮒が群れをなして泳いでいる泉水があって、湧き出る泉から引き込まれたきれいな水が湛えられていた。枝振りのよい松が身を乗り出して、深緑の影を落とし、中ほどに作られた一・五メートルほどの島には小振りのアララギとともに珍しい八重咲きのツツジが植えられていた。

築山の背後にある荷蔵、土蔵、味噌蔵の三つを包むように組み込んだ二階建ての隠居家は、その後増築されたものであった。勿論弥一の隠居家として建てられたものだが、二階の部屋は彼の始めた鯉節問屋に、商品を運んでくる土佐や薩摩の商人を泊めるために使われた。八畳と六畳の二部屋が上下ともにあり、二階にも炊事場が付いていた。隆一は家業を継がず役場勤めと

なって、昭和の初期には商売を廃業したので、その二階は子供のいない家族に貸したり、諏訪中学の学生を下宿させたりしていた。

初子の婿養子で幸子の父の淳圓は、仏教学者であったが軍隊の幹部候補生でもあって、太平洋戦争勃発の四ヵ月前昭和十六年九月に、招集令状を受けたのだった。そしてある夜、密かに中国大陸に出征して行った。戦争前の機密ということだったろう、歓呼の聲に送られて、というものではなかった。

夫を戦地に送り出した初子は、それまで住んでいた世田谷の家を三峰陸軍少将の一家に貸して、幸子を頭に俊一、文子、頼子の四人の子供と共に信州の実家に身を寄せたのだった。

祖母のよねと共に隠居の二階に移ってきた木原博は、中学三年生の物静かな子であった。学校から帰ると先ず泉水の端に下りて、きちんと足を洗ってから部屋に戻った。そして糊のきいた白緋の浴衣に着替えていた。

「よく躰けられている」

と初子が言った。

孫の面倒を見るために一緒に住んでいたよねは、九月も半ばになると農繁期ということで蓼科の麓の村に戻るようになった。

「明日から博ちゃんは、おうちでご飯ですよ」

と初子が言った。一ヵ月も裏に住んでいるのに、幸子は博を時折ちらりと見かけるくらいで口をきいたこともなかった。

翌朝、博だけは幸子一家が食卓に着く前に朝食を済ませて登校してしまっていたので、子供たちと顔を合わせることがなかった。明治五年創立の高島小学校は、幸子の家のすぐ裏の山、手長ヶ丘にあるが、諏訪中学のある清水ヶ丘までは二キロ以上もあり、早々に登校するのが博の習慣でもあった。

従って子供たちには、いつもどおりの朝であった。朝の一時間ほどは、子供ながら幸子にとっても一番忙しい時間帯であった。

すでに日の出とともに隆一が隠居から母屋に戻って来て近くの温泉、精進湯に朝湯に出掛けていた。朝湯は隆一の子供時代からの習慣である。諏訪市は別府に次ぐ湧湯量を誇っている温泉の町で、あちこちに銭湯があり、個人宅に浴室が殆どない当時は、年寄りばかりでなく時間さえあれば誰もが朝湯によく行ったものだった。

初子は、表座敷に寝ている子供たちを起こして、蚊帳を外す。部屋の四隅や柱に設けられている蚊帳吊りの紐を解くのだ。モスグリーンに赤い縁どりのしてある大きな蚊帳が、まだ床の中でぐずぐずしている子供たちの上にバツサリと落ちて来る。子供たちは、慌ててモソモソと這い出すのだ。初子は吊り手の根元を器用に揃えてそれを畳み収納すると又台所へ戻る。着替えを済ませた弟妹たちが布団を畳み、長女の幸子がそれを押入れに入れるのだが、きちんと畳み布団の下から手を差し入れて、平らになるように仕舞わないと、全員の布団は納まらない。外から見て布団が横一文字にきちんと揃って入っていなければ、几帳面な隆一のお小言を受けることになるのである。

身長ほどもある竹箒で家の前の通りを掃くのも幸子の役目である。舗装されていない旧甲州街道の土の道に、山の形の箒目を通りの向こうまで揃えて付けながら、何回も往復して、間口は八間ほどの家の前を掃く。通りも今見れば狭いものだが、当時の幸子には広い道に思えたものだ。

掃き終わると長い柄の杓で家の前を流れる小川の水を道に打たねばならない。下手に打つと水は弧を描いて遠くまで届かない。子供にはそこまでは要

求されてはいなかったが、幸子はなるべく垂直に打ち、罫目を崩さずに遠くまで届くようにと心掛けるのだった。それは幸子の美学とでもいうのか、日常の身边には投げやりの幸子だったが、妙なところにこだわる癖があった。

朝湯から戻った隆一に新聞を持って行くのは二年生の俊一である。隆一は俊一に宿題のノートを持って来させ、座敷の座卓の前に正座させた。成績優秀な俊一は隆一の自慢の孫で、毎朝宿題の点検をしてやるのが、二年前に妻に先立たれた彼の楽しみだった。書き取りの字が汚いと消しゴムできれいに消しては書き直させ、計算は間違いないかと目を通すのだ。

それが済むと、隆一は幸子と俊一に筆箱を持って来させ小刀で鉛筆を削ってやる。彼は、鈍い光を放つ鋭利な小刀の鞘を払って、鉛筆の六角形の角に刃を当てがって芯の先まで一直線に削って行った。どの角からもすらりと形よく削られた鉛筆を持って登校することは、幸子の自慢でもあった。

朝食は、全員が台所脇の丸いちゃぶ台を囲み、配膳が済んでから、一斉に「頂きます」と挨拶してから始まる。漬物にみそ汁、ほかに何か一品程度の簡単なものである。

登校は戦時下ということで、一年前から集団登校になっていた。各町々に少年団が結成され、上級生が団長、分団長、班長と決められ、各班長が班のメンバーを纏めて登校するのだった。幸子たちの班長は六年生の小口家の長男貞ちゃん、幸子の家の前に二列に整列し、全員が揃うと、「気を付け。左向け左。前へ進め。」

と号令をかけ学校目指して行進である。そして手長神社の百五十段の石段を登り、大きな石の鳥居をくぐると、それぞれの学年の昇降口へと別れるのだった。古びた木造の高島小学校は、高等科、家政科も入れて七棟もある大きな学校であった。

放課後下校すると、空腹を耐えられなくなるまで遊びほうける。かくれんぼの百まで数える代わりに、「ダルマサンガコロンダ」を十回唱えてよしとすることになったのはこの頃からだった。陣取り合戦などは中、低学年の子供たちが総出で町の中を走り回った。

夕焼けが丘の上の空一帯を染め上げ、無数の燕の黒い影が飛び交っているのが見える頃は、夕食の時間である。

その日は初子が幸子に、  
「博ちゃんを呼びなさい」  
と言った。幸子は勝手口に立ち、声を張り上げて、

「博ちゃん、ご飯ですよ」  
と隠居家に向かって叫んだ。

初子が、台所に続いた板の間の畳ござの上に丸いちゃぶ台を出し、裏側にある折り畳みの脚を開いて据える。ご飯のお櫃や鍋などが運ばれると、幸子が茶碗や汁碗の入った膳箱や小皿、箸立てなどを運ぶ。そして隆一を中心にそれぞれが席に着く。

「今晚は」

やや緊張した面持ちで博が入ってきた。勧められて、空けてあった隆一の隣に黙礼して座った。それは丁度幸子の対面であった。

浅黒い丸顔の博は、鼻筋の通った、目の大きな子で、引き締まった口もとをしている。美少年という表現には当たらないのかもしれないが、整った顔だちである。寡黙で、軽薄な陽気さはないが、見開いた目は明るく、幸子も

弟妹も一遍に博に好感を持った。しかし子供たちは遠慮して、いつもより静かにしていた。

配膳が終わり、挨拶して食事である。魚の皿以外は全て鉢盛りで、採り箸で銘々が皿に取り分けて頂くのだが、直接ご飯の上におかずを取って載せることは、乞食のすることだ行儀が悪い、と注意された。初子は博に、煮物や浸し豆を適当に取り分けて勧めた。

隆一は博に中学にいる知人の教師の近況を尋ねたりもしていたが、食事どきは誰もが口数は少ない。

行儀よく、好き嫌いを言わずに淡々と食べる博に、初子は満足した。そして母親らしい気配りで、子供たちとも和むように、時折あれこれと話かけ、それに博も素直に応じるのだった。

軒先の風鈴が時折チリチリと鳴って、蚊やりの煙を揺すっている。外はいつしか宵闇に包まれていた。

翌日の夕食の時には、もう子供たちも博に遠慮することはなかった。相手が何才も年上なのに母にならってみんな「ひろしちゃん」と呼んだ。博も目をクリッとさせて、ゆったりと優しく応じるのだった。

それから二三日した午後、幸子は池の端で足を洗い終えた博を見かけた。

「博ちゃん、遊びに行ってもいい？」

と幸子が聞いた。博は幸子を見つめ

「いいですよ」

と答えた。幸子は母に

「博ちゃんどこに行ってくるよっ」

と告げると靴脱ぎの石の上の下駄をつっかけて博の後を追った。

二階の奥の八畳が彼の勉強部屋になっていた。正面にはダークグリーンの砂壁の床の間があり、違い棚には明り取りの円形の小窓が切られている。

机は南面するように西の隅に置かれていて、脇に一・五メートル程の高さの本棚があった。いずれもきちんと整頓されていた。

身近に子供のいない博は、おしゃまな九才の女の子にどう接してよいのか困惑気味のようなようだった。何か雑誌でも一冊与えておけば、何時間でも読み耽っている子だということは未だ知らなかった。

博は、比較的絵や写真の多い科学雑誌を開いて幸子に見せた。白いゲートルを巻いた兵卒が中腰になって模型飛行機の行方を見ている絵があった。二宮忠八だと幸子は思った。「この人は二ミヤチュウ八チって、日本で初めて飛行機を発明した人ですよ」

博が説明する。「二ノミヤ」でしょうと幸子は心の中でつぶやきながらも、初めて聞くことのような顔で本に見入った。これが学校だったら、勇ましく手を揚げて訂正するのだが、子供心にも遠慮していた。

父が仏典の翻訳をしていて、その書斎の隅で本を読み耽って育った幸子は、子供ながら相当な物知りだった。暗記力もあって、既に百人一首は全て諳んじていた。それに当時は新聞をはじめ多くの本に全てルビが付いていたからその気さえあれば子供にも読むことが出来たのである。まだ当用漢字は制定されていなかったもので、難しい漢字が多く使われていたためもあるうか。しかしそれは知らず知らずのうちに、子供たちに漢字から受ける情緒を涵養していたのだ。幸子は祖父の本棚の改造社の文学全集にも手を伸ばすようにな

っていた。

「そうだ。お化けを描いてあげようね」

博は藁半紙を取り出すと、髪を振り乱した三白眼の目を吊り上げた女が、牙を剥いている絵を描き始めた。幸子は覗き込みながら、

「わあ、怖い、怖い」

を連発した。自分でも一寸わざとらしいかとも思った。

その日は、その絵をもらって、

「有り難う。また描いてね」

と階段を降りた。

下の祖父の部屋を覗くと、隆一は不在であった。違い棚には芥子色の布の装丁の落語全集が並んでいる。幸子はそれをそっと手にとった。これを読んでいるところを母に見つかったら叱られることは間違いなかった。

ダークグリーン of 紋織りの布で装丁された講談全集を、隆一は母屋に持ち込んでいたが、幸子がそれを読むことはなかなか許可されなかった。「頭が柔らかくなる」というのが初子の言い分であった。しかしその禁断は、初子が幸子の執拗な要望について根負けして終わった。実際のところ隆一も初子も幸子には甘かった。

幸子は障子の影に寝そべると、本を開いて見た。

「可愛い新兵さんにや金がない、なっちょらん、なっちょらん」

ラジオで聞いたことのある文句だ。幸子は、母の呼ぶ声が聞こえるまで密かに夢中になって読み耽るのだった。

初冬になり、各部屋には堀炬燵がしつらえられた。野沢菜や沢庵など漬物を漬ける大仕事を終えた初子は、子供たちのセーターを編むことに没頭するようになった。

よねは時折農産物などを運んで来るが、面倒は博の姉の幾乃が見ることになり、よねに代わって住み込むようになった。十八才の色白なふっくらとした体つきの娘で、あまり垢抜けていない。一重瞼のやや腫れぼったい目をしていることも、博とは全然似ていない。農閑期を利用して、午前中は町なかで裁縫を習いに通い始めていた。

博の叔父の塚本真二は県立諏訪高等女学校で国語の教師をしていた。カーキ色の国民服を着た背の高いひょろっとした中年の男で、登校の折りに依頼された甥のための米や野菜などを運んで来るのだった。

「ごめんなさいよ」

とやや前かがみになって会釈しながら奥へ通る。無類の酒好きということで、横鬢のあたりは酒焼けしていた。

お化けの絵以来、幸子は博の部屋には入っていなかったある日の午後、博の留守に幾乃に呼ばれて二階に上がった

炬燵に当たると、幾乃は実家から持って来たおはぎを幸子に勧めた。幸子はいんこやきな粉など甘いものが苦手だった。おはぎは胡麻のものを少し食べるだけで、母にもち米の入ったご飯を潰す前に一膳取っておいてもらう程だった。しかしその時はおとなしく時間をかけて一つ食べた。

「博っておかしな子よ。変な所にも気を使ってね。『今、下にじいさんは居るかね』って聞くから『居ないよ』って言うと、おならをするんだから」

幾乃と一緒に幸子も声を挙げて笑った。二階のおならが下に聞こえるだろうかなんて考えたこともないと幸子は思った。

炬燵の傍らに雑誌のキングがあった。当時の大衆誌で厚さが五センチほどもり、グラビアや小説、マンガ、広告と様々な記事が満載されていた。幸子はそれを読み始めた。

「ちょっと貸してご覧なさい」

幾乃は手を伸ばしてそれを取ると、パラパラとめくってマンガを探し、開いて幸子に渡した。幸子はそれをざっと読むと、又、先程読んでいた日蓮の伝記小説に戻り読み続けるのだった。また幾乃が他のマンガを探してくれる。幸子はそれを読んで日蓮に戻るのだった。

やっと幾乃は幸子が本当に日蓮を読んでいるのだと気がついた。このことはよねとの間で話題になったらしい。

何日か経って、また幾乃に誘われて二階に上がるとよねも炬燵にいた。やはり博は不在だったが、二人はかきもちを焼いて、野沢菜漬けを切り、お茶を入れて幸子をもてなした。

新しいキングがまたそこにあった。幸子はまた日蓮を探して、連続の続きを黙々と読み始めた。幾乃はよねに目配せをして

「ほらね」

と言った。

それからは幸子の方から週一回くらい訪れるようになったが、博は殆ど不在だった。しかし幸子は、日当たりのよい隠居の二階の炬燵に当たりながら、口数の少ない幾乃の傍らで、母に内緒で大人の雑誌を読むことに、とても満足していたのだった。

春になり新学期がはじまって、幾乃はまた実家に帰った。今度は博の近所の子だという一級下の中学生が加わり、よねが二人の面倒を見るようになった。博より小柄で骨太な新入りの中学生は、はやくもニキビが出ていて、何処か不潔な感じである。白緋の浴衣も萎えている。幸子はなじめずに口もきかなかった。

四月、天長節（天皇誕生日）の午後隆一が激しく下痢し昏睡状態になった。前夜、隣組の役員二人で、東京から疎開してきた元海軍大佐の葬式の面倒を見たのだ。細身で権高いが家事は苦手な奥さんから、最後に出されたものが食中毒の原因になったらしい。壮年の味噌屋の主人は下痢だけで済んだようだが、老齢の隆一にはこたえた。慌ただしく近所の人が入り出す。看護婦を連れたホームドクターの塩沢病院の院長も老齢ながら駆けつけて来た。

結局、隆一はその後余病を併発し、二度と起き上がることはなかった。

初子は、中年の快活な住み込みの保健婦に看護を頼んだ。逞しい彼女のキャラクターが加わったことも生活の変化であったし、毎日のように医師の往診があり、見舞客の来訪も多く、幸子の生活は落ち着かないものとなっていた。

初子の肩には何もかもが重くのしかかっていた。気丈に忙しく立ち働いていたが、気安く頼める長女の幸子に雑用をよく頼んだ。幸子は、当時の子供たちの中では働かない子の部類に入っていた。同年の子たちは子守や掃除など身軽にくるくるとよく働くのだった。何かしていても思考が手元から離れてしまいがちな幸子は、テキパキと片づけることは苦手で、時間ばかりかかっ

てしまう。結局外で遊ぶ暇も無くなって、隠居に下宿している中学生たちに気を留めることも殆どないうちに、日々が過ぎていった。

こうして発病の三ヶ月後、孫たちの夏休みが始まった直後の七月末、隆一はあっけなく他界したのだった。

隆一の四十九日の法要も済んで、又秋が巡って来た。後から加わった学生はいつの間にか居なくなり、博一人になっていた。また夕食に博が加わるようになった。

博の話では、中学四年生は二週間後には鉄鉦の鉦山に行かねばならないと言う。学徒を使って、出征兵士による労働力不足の補強をするのだ。実際の危険な仕事は朝鮮からの徴用者がやって、監督や督励をするらしい。

博が当分はいなくなるんだと思った幸子は、翌日、久しぶりに博の部屋に遊びに行った。

勉強は何が好きかと聞かれた幸子は、五年生から始まった国史の授業が一番面白いと話した。担任の老練な先生は歴史の知識が豊富で、いろいろな逸話を話してくれるし、質問もしてくれる。皆の知らないことを答える快感が幸子にあった。

「今ね、太平記が気に入ってるの。何回読んでも面白いよ。それでね、この間「神皇正統記」を買ってもらっちゃった」

初子が戦地の淳圓に送ろうと買って来た、鷲尾雨工の著という太平記は、幸子がいつの間にか読了してしまった講談本のように面白いもので、もう幸子の物になってしまっていた。そしてその頃、本屋で紙質は悪いが単行本の「神皇正統記」を見つけた。幸子は、鎧を背に老法師が筆を取って、それを記述している太平記の挿絵を思い出して、初子にねだって買ってもらったのだった。

北朝の正統性を説く北畠親房の正統記は、ルビは付いているものの、幸子には難解で、およそのことしか読み取ることはできなかった。歯がゆく思った幸子は、いっそ出来るだけ暗記してしまおうと思っていた。

「神皇正統記」と聞いて、博は、一瞬幸子を見つめた。しばらくは黙って幸子のおしゃべりを聞いていた。幸子は中学とはどんなことを学ぶのだろうと興味があって聞いてみたのだが、博はその質問にはあまり答えなかった。学校の勉強の中身など説明の仕様もなかったのだろう。彼はノートの取り方や整理の仕方などを教えようと、ノートを取り出し自分の方法を説明するのだった。しかし幸子は集中力があって暗記を得意としていた。それにまだ小学生でノートを取る必要性など感じていなかったから、全て上の空で聞いていた。女学生になってから、そういえば博のやり方はどうだったのだろうと、身を入れて聞けなかったことを、一寸残念に思い返すのだったが。

幸子は本棚に唯一読めそうな「次郎物語」を見つけて借りると

「ありがとう」

とそれを抱えてスカートを翻し、階段を駆け降りて母屋に戻ったのだった。

戦局は、徐々にかげりを見せていた。大都市の爆撃も心配になり、学童疎開が始まった。幸子のクラスにも東京、名古屋などからの疎開者が五月雨式に増えていた。

池の裏に防空壕を掘り食料を、貯蔵したり、夜は町内総出の空襲の防火訓練

や竹槍訓練などがあって、母親たちも忙しく立ち働いていた。子供たちは、夜の街角で行われる母親たちのバケツリレーや竹槍の突きの訓練を見に行き、誰それのお母さんは恰好がいいなどと話し合った。モンペをはき、真剣な顔でバケツを持って走って水を掛けるしぐさをする初子はまだ若かった。

夏休みに入ったばかりの頃、博がひょっこり訪ねて来た。表座敷にきちんと座って、初子と幸子に

「この間、空襲で亡くなった人の腕を1本もらったんです。解剖するためです。それを一晩押入れに入れておいたんですが、とても怖くてなかなか眠れなかった」

などと、いつものゆっくりした口調で近況を話して帰って行った。博は学生服ではなく、国民服と言っていたカーキ色の服でズボンにはゲートルを巻いていた。もう大人の仲間入りをしたんだなと幸子は思った。

諏訪はまだ無傷だったが、甲府が空襲でやられているということは、戦争が間近まで迫っていることを実感させた。そして時折は空襲警報のサイレンが鳴った。幸子は寢床の中で、灯火管制の黒い覆いを被せられた電灯から洩れる明かりにぼんやりと浮かぶ天井を見上げては、不意に上からそこを突き破って爆弾が落ちて来るのではないかという恐怖に脅えるのだった。

やがて終戦の日を迎えた。新型爆弾が広島に落とされたとは口伝えに聞いたものの、どんなものかは想像外だったし、それが終戦に繋がるとは思ってもみなかった。

その夏休を母子五人は農家の初子の従弟のところでも過ごしていた。配給の食糧は限られていたので、篤農の従弟の畑の恵みは有難かった。白や紫の粒の混じった新鮮なトウモロコシは子供たちには久しぶりのご馳走だった。

終戦後の一時は、軍の物資だった鮭缶などが配給されたものの、たちまち戦時中にも増して食料事情は悪くなった。初子は子供たちの食料を工面する必要に迫られて、毎日のようにリュックサックを背負って、伊那の農家の親戚を巡って食料の買い出しに出掛けるのだった。

冬が近づいた。初子は、若い頃のラクダ色のオーバーを着て買いだしに出掛ける日が多かったが、多少時間にゆとりが出来たのか、さつまいもを蒸した時の汁を煮詰めて飴を作ったり、干し柿を吊るした。凍り餅という信州独特の保存食を、おやつ用にと胡麻や海苔入りのものや、かぼちゃ入りのものなど作った。子供たちに食べさせることが毎日の大仕事であった。

初子の留守の間は食事を作るのは幸子の役目であった。少ない米に芋や大豆などを混ぜて炊く。しかもそれは炊きあがった上に湯が三センチほどもあるようなダブダブのご飯と言うより雑炊である。材料や分量は全て幸子の裁量による。幸子は正真正銘の水増しご飯を竈に薪を焚いて上手に作った。メリケン粉に砂糖、塩、重曹を混ぜて作る薄焼きもよく作って、弟妹たちに食べさせるのだった。ある時、

「薄焼きを作ってやるからあっちに行ってなさい」

と弟妹たちに言った。コンロの周りでウロチョロされるのがうるさかったからである。包丁をフライパンの薄焼きの下に差し込んで引っ繰り返すのだが、一寸ずれて縁にかかってしまった。幸子はその縁の焦げた部分を剥いで口に入れた。とたんにクスクスと笑い声が聞こえる。弟妹たちが戸の隙間から覗いていたのだ。幸子は滅多にそんなことはしないのだが、この一件は大いに幸子の威信を傷つけてしまった。

戦後の一転した教育現場の混乱は、落ち着いての授業などは望むべくもなかった。戦災に会わなかったことだけでも幸いだった。国語は三分一ほど墨で塗り潰さねばならなかったし、歴史や音楽の教科書は使われなくなった。しかし六年生としては、そろそろ女学校の入試の準備をしなくてはならなかった。

弟妹相手に毎日を過ごしていた幸子は、級友たちとは疎遠になっていたのも、受験の情報は全く入って来なかった。級友たちは、兄や姉のいる友達から助言を得て、仲間同志で面接の練習などもやっているようだった。不安がる幸子に初子は、

「試験に落ちたらピアノとお琴を習わせてあげるよ」

と言った。当時クラスで足踏みのオルガンが家にあったのは幸子の他には一人しかいなかった。幸子は以前からピアノを習いたいと思っていたから、それもいいなと単純に考えるのだった。

受験の日が来た。幸子は初子がブルーとグレーの極細二本取りで編み、胸一杯に花のステッチの刺した心尽くしのセーターを着て出掛けた。

第一日目は学科試験だった。国語、算数、理科、社会であったが、そんなに難しくはなかった。第二日目は体力テストと口頭試問と呼ばれていた面接である。幸子の一番苦手はこの体力テストであった。

戦時中は色々な体力テストがあった。百メートルを何秒で走れるか、幅跳びは何メートルかなどというのは何も珍しくはないが、鉄棒の懸垂を五回とか手榴弾を十一メートルなどというのは今はない種目だろう。徒競争は決まってビリになる子がいて、幸子はいつもビリから二番目だったし、懸垂は飛びついたところを誤魔化して一回。手榴弾投げは七メートルしか飛ばなかった。小学一二年生の頃、中耳炎から腎臓を患って、その間殆ど学校に行けなかったこともあって、普通の子より体力はなかった。

女学校の体力テストは、整列後まず体育館内を二周駆け足で回る。再び整列した生徒一人一人の顔を、木の薙刀を片手にした体育の女教師が覗きこんでチェックする。

次は音楽室で行われた。ピアノのある大きな高い教壇に呼ばれた三人が上がって、先生の号令で腕立て伏せをやるのである。ふと片隅で結果をノートに記している教師の顔を見上げると、それは博の叔父の塚本真二だった。

果して幸子は一回目の腕立て伏せさえもお腹がついてしまった。それでも何気ない顔で続けた。塚本先生はきっと見逃してくれるという妙な自信があった。

幸子は無事諏訪高等女学校に入学した。小学校の六十人の女子クラスから十人が受験して、入学出来たのは六人だった。そして残りの生徒は、すぐに奉公など働きに出る者と、小学校に付随している二年製の高等科に進む者に分かれるのだった。

新しい学校生活が始まった。

女学校は色々規則がやかましい。髪は三つ編みのおさげにするか、後ろで二分してゴムで結わえるのだが、結び目から下の髪の長さが拳一つ以上なくてはならない。制服はフランス型の襟のセーラー服であるが、新品など仕立てられる時代ではなかったのも、あるものでよかった。それでもスカート丈は膝下五センチに揃えねばならない。登校時には教師や上級生に「おはようございます」、下校時には「おやすみなさいませ」と言って深々と頭を下

げること。左の袖付けから十センチ下がったところに、ボール紙に布を貼って各自が手製した五角形の校章を付けることなどであった。

戦時中の物不足で、校章のバッヂも作ることが出来なくなり、美術の宮芳平先生の考案による、諏訪神社のご紋章を簡略化した中に「女」の字をいれたものが校章であった。作るのは大変面倒な作業であり、紺、黄、白の素材も人によってまちまちなのだが、これを付けていることは当時の女学生の誇りでもあった。

授業らしい授業はまだ行われず、一日中作業に終わることが多かった。野菜畑に変身していた校庭に、四キロも離れた四賀村から砂を運んで、グラウンドを整備する作業は特に厳しかった。自転車のある人はそれを使ってよいが、ない人はリュックで背負って運ぶのである。その他、校有林の枝払いや、平石山の奥まで鍬を担いで開墾にも行った。しかし一度も収穫には行ったことがなかったから、多分成育しなかったのだろう。

五月初旬のある日、帰宅すると玄関に大きな軍靴があった。父淳圓が中国から復員して来たのである。

若く快活だった淳圓は、五年間の出征の間に眼光鋭い日焼けした無口な男に変貌していた。

山砲の中隊長として、五年間も当番兵に身の回りの世話を何もかもしてもらい、命令一下直ちに兵士たちを動かして来た彼であった。単純な仕事の命令に対する子供たちの緩慢な動きに彼はすぐ腹を立てて、ピンタを飛ばすのだった。それまで初子に寄り添ってのんびり過ごしてきた子供たちには、しばらくは戦々恐々の日々となった。

食料の配給は滞りがちだった。そしてある日、役場からパンの原料にするからと、一人三キロずつの干し草を供出するようという通達があった。

これは町の中に住んでいる杉山家としては難題であった。初子は博の実家に草を刈る場所があるかを問い合わせた。そして山の林の中に蓬の群生している処があると知らされると、一家総出で草刈りに出掛けることとなった。

博の家は白樺湖の下の集落にあった。白樺湖は人造湖で戦時中に完成していたが地元にもあまり知られていなかった。現在のように観光開発される以前である。直通のバスはまだなく、茅野から蓼科に行くバスの途中で降りて、枝道を二キロほど登らねばならなかった。六月のある日、一家は博の家に二泊の予定で、早めの昼食をとって家を出た。

バス停には、野良着のままの博の母が出迎えていた。トラックが行き交うことの可能な幅はある道だったが、舗装されていない石ころ道で、西日を受けて埃っぽい。所々馬糞も散乱しているが、子供たちはまさに遠足気分で、嬉々として歩いた。

博の家は南斜面の広い農作業の庭のある、がっしりした農家であった。厩には鼻白の栗毛が草を食んでいた。博の兄と嫁が祖母のよねとともに出迎えた。博の父は何年か前に他界していた。それぞれ日焼けしているものの、目鼻だちの整った、実直な中にも品のある一家であった。

庭に面した大きな座敷に通され、そこに杉山一家はくつろいだ。夕食は白いご飯に野菜の煮つけや蕨のおしたしなどが大きく盛られて運ばれた。子供たちは大喜びで奪い合うようにして食べた。淳圓はそんな子供たちを一喝したいところだったが、我慢していた。そして初子に不機嫌に、「なんでこんなに躩のない子にした」

と言った。

食後、博も挨拶に来た。松本の医専に移ったと聞いていたが、杉山一家が来るというので、急遽戻ったのだろうか。

やがて座敷に縞柄の木綿布団が並べて敷かれ、子供たちはリュックの中から寝巻を出して着替えた。パジャマはまだなくて浴衣に紐の付いたものである。幸子も紫陽花の柄の浴衣に着替えると、電灯が消された。ふと障子の雪見窓から外を見ると、博が庭に佇んでいるのが見えた。誘われるように幸子も寝巻のままそっと庭に下りた。

空には満月に近い月があって、皓々とあたりを照らしていた。向かい合って二人は立っていた。

「女学校はどうですか」

と低い声で博が聞いた。

「まだあんまり授業はないの。教科書もないから、先生が手書きのものを刷ってくださるんだけど、アルファベットの筆記体なんてよく分からないわ。博ちゃんの昔の教科書なんてないかしら」

幸子も同じ低いトーンで答えた。

「うーん。もうそんな昔のものはないですよ」

「博ちゃん、松本に移ったんですってね。甲府とどっちが遠いの？」

「まあ、同じようなものですよ。明日は松本に戻らねばならないんです」

「えっ。さっき帰ったばかりでしょう？」

「ええ」

博は口をつぐんだ。

「いいお月さまね。博ちゃんのお家はいい所にあるのね」

幸子は空を見上げた。薄紫の雲が月を掠めて走っていた博も無言で見上げている。幸子は口マンチックとはこんな時のことをいうのだろうかと思った。博が手を伸ばせば幸子の肩に触れるだろう。幸子は胸がときめくのを覚えた。だが、まだ彼女にはこの沈黙の緊張に耐えることが出来なかった。

「じゃあ、お休みなさい」

と幸子は言うのと身を翻して家に戻った。そして布団を被り胸の動悸を静めようとして、二度と庭には目をやらなかった。

翌日はよく晴れた。杉山一家が起きたときには、もう博の姿はなかった。皆は四丁の鎌を借りて博の兄のあとに従った。山の南面に植林された杉が背丈ほどに育ち、その間に一メートル程にも伸びた蓬が一面に群生して、春風に靡いて葉裏の銀色をきらめかせていた。

「あなた、刈ったものはここに集めて干しましょうよ」

初子のときめくような口調が、新婚さんのようだと幸子は思った。

心尽くしのおむすびを頬張って、午後も作業は続けられた。そして日が傾くころまでには目的に十分な量は確保出来たのだった。その収穫物は干し上がったなら届けてもらうことになっていて、その場に山積みにしたまま置き去りにして山を下りた。そしてもう一泊した一行は帰途に着いたのだった。

博はその後、三月に一回ほどの間隔で訪れるようになった。その都度何か本を幸子に与えた。

「Once upon a time」で始まるイソップ童話の易しい英語の小冊子を何冊か置いて行ったこともあった。シェクスピアの四大悲劇を単純な物語にした英語の本の時もあった。ヴァンルーンの「人類解放物語」

は幸子に歴史の新しい目を開かせてくれたが、岩波文庫のプラトンの「理想国」はチラリと見ただけで本棚に載せられた。博は三十分ほど初子や幸子とよもやま話をして帰っていくのが常だった。

学制が変わり、女学校は高校になって、幸子たちは併設中学ということになった。高校生になったとき、幸子は厚さが八センチ程もある岩波の英和大辞典を博からもらったその臙脂色の表紙はしなやかで引き易く、長く幸子の愛用のものとなった。

初子は、父のいない博の家族がどんなに苦労して博の学費を工面しているかを知っていた。幸子への本代もそうした中からのものである筈である。彼女は、彼の行為が気になっていた。それに初子は当時もてはやされていた「愛染かつら」のように、医師と看護婦の間に対して漠然とした警戒心があった。博の清廉の魅力を若い女たちが放ってはおく筈はないだろう。父隆一の女性問題に悩み抜いていた母の思い出が初子にはあった。

知識欲旺盛な幸子に、ある期待を持っていた初子は、娘に男友達はまだ早いと考えていた。ある日博の帰った後、嬉しそうに本に見入っている幸子に、初子は一寸顔をしかめて言った。

「お医者さんて、看護婦さんと問題を起こすことが多いようよ」

インターン間近の博は、正月の挨拶に来たのを最後にプツリと幸子の前に現れなくなった。

ある日、大学受験の準備に夢中になっていた幸子に、初子は噂話のような調子で、博が信州大学から新潟大学に移ったと言った。何気なさを装っている初子の口調に、幸子はかえって奇異の感じを受けた。

新潟とは地図の上でしか知らない。もうそんなに会えないのだなという寂しい思いが、ちらりと頭をよぎったものの、それから二度と会えないことになるなどは夢にも思わなかった。それに幸子の思いはすでに東京にあった。

幸子は、第一志望の東大受験には失敗したものの、早稲田大学の史学科に入学した。新制諏訪二葉高校の卒業せとしては、初めての早大入学生であった。

長野県では女学校は新制高校になっても強制的には男女共学にはならなかったから、構成員は女学校のままであった。幸子は初めて男子の学生の中に立って、大きい体格的の彼らに圧倒された。一人野に放たれた心地で戸惑うことや不安が多かった。しかし自分が望んで選んだ道である。男性にだって負けるものかと、肩肘張って、精一杯背伸びをするのだった。

やがて幸子はキャンパスで知り合った酒井敏彦と結婚した。三年生になる春のことであった。そしてそれから夫とともに殆ど東京で過ごすことになり、いつか博の存在すら意識から消えていた。

幸子の大学卒業後十五年が過ぎた。その頃夫婦は三多摩の新開地、豊田に造成された公団住宅に入居していた。夫の敏彦は平凡な一サラリーマンとなって都心への通勤に明け暮れていたし、四人の子の母となっていた幸子はひたすら子育てと日常の家事、家計のやり繰りに追われていた。

残暑の厳しいある日、一通の往復葉書の案内状が届いた。東京在住の高校時代の同級生が、十月初旬の日曜日に、新宿で同年会を開きたいという知らせだった。幸子は早速出席の葉書を出した。

長男は中学生になっていたが、末の子はまだ二才であった。遠出の出来な

いこの時代は、お付き合いも近所の主婦か子供たちのPTA関係が主となっていた。新団地に入居した当時は訪れて来た高校や大学の親しかった友人たちとも、いつか疎遠になっていた。

同級会当日の朝はよく晴れていた。幸子は手早く家族の昼食を用意して、いそいそと自転車に飛び乗った。そして駅の前の自転車の集団の中にそれを置くと、まだ新装なったばかりの駅の階段を駆け下りた。

会場は新宿駅からさほど遠くない料理屋であった。入り口に掛けられた木札で確かめて座敷に案内してもらった。十五六人が既に座っていた。

中を覗いた幸子は一瞬部屋を間違えたのではと思った。そこには色とりどりの服装をした中年のオバサンたちが、顔を寄せ合ってしきりにおしゃべりをしていた。幸子は殆どの同級生とセーラー服姿の卒業式以来会っていなかった。幸子はハッと気づいた。ああそうだ、自分もいつかオバサンの一人になっているのだ。納得した幸子は座敷に入った。

「幸ちゃん、幸ちゃんでしょ」

何人かが近寄って話かけてきた。

「私よ、和ちゃんよ」

「分かる？上原友恵よ」

幸子は女学生時代は目立つ存在であった。相手は幸子を知っている。しかし彼女には名前を聞いて思い出せる友人は半分ほどしかいなかった。それでも分かったような顔をして、にこやかに挨拶を交わすと、卒業後何回か会っている友人の側に座った。ぼつぼつ人数も増えて、三十人を越える人々となった。

やがて世話役をしている同級生二人に案内されて諏訪から三人の男性の恩師が入って来た。音楽を選択したことがなかったので、あまり馴染みのなかったがっしりした音楽の教師と、復員後中途から入って来た小太りの国語の教師、それに博の叔父の塚本真二であった。すでに定年を迎えた彼らは、それ相応に年老いてはいたが、十分に往時の面影を残していた。

料理が運ばれ、主催者や教師たちの挨拶、乾杯も終わって、中年女性の若やいだ気分の雑談が華やかな雰囲気醸し出していった。ややあって近況を一人一人報告することになった。ふとした仕種や声で思い出すことの出来た人、旧姓を名乗ったことで分かった人など幸子はその顔に娘時代の面影を重ねながら聞いていた。大半は結婚して妻の座に着いていたが、教師として独身で頑張っている人も三人ほど、離婚した人、早くも未亡人になった人などと、やはり社会の一断面を見せていた

そろそろ席を立って移動しては、挨拶や話し込む人たちが始めて、座が乱れて来た。幸子も、懐かしい友達と一くさりお喋りした後、塚本真二の前に座った。

「先生、杉山でございます。今は酒井と申します。暫くでございますね。でもそのお顔色では、相変わらずご晩酌が続いているようですね」

卒業以来初めての再会であった。御無沙汰を詫びていて、幸子はふと長い間意識の外にあった博のことを思い出した。

「ねえ、先生。博ちゃんは今どうしていらっしゃいます？」

気軽に幸子は聞いた。中、高と六年間も同じ学校に通って、その間真二には何年も教えてもらっていた。現代国語、古典、進学指導などであった。しかし当時は一度も真二に博の名前を口にすることはなかった。

飄々としてユーモアたっぷりの受け答えをしていた真二は一瞬顔を上げ、真っ直ぐ幸子を見つめた。

「あいつはね、まだ新潟にいるんだよ。まだ独身でね。帰って来て家の近くに病院でも建てろって言っているんだがね」

そして視線を外した真二は、手にした杯の酒を口もとに運んだ。そして遠くを見るような目つきをした。

「あいつはね、お前の姉さんが好きだったのさ。そいでまあ、あいつはとうとう独身で終わるようだよ」

エッと幸子は思わず息を飲んだ。声も出なかった。思いもよらぬ衝撃であった。幸子は心の中で叫んだ。

「先生、先生。私が幸子ですよ。私に姉さんなんている筈ないじゃないですか。博ちゃんは本当に私が好きだったんですか。本当にまだ独身なんですか」

無言で目を見張っている幸子に真二は続けた。

「何を考えているのかねえ。あいつには皆が期待していたんだが、帰って来ないのさ。お前の姉さんが忘れられないらしいね」

幸子はすっかり混乱していた。真二が幸子を妹の文子や頼子と間違えるとは思えなかった。文子は高校卒業後は両親を援けてずっと諏訪にいたから、真二とは時折顔を合わせている筈であったし、頼子は身長も高く風貌も似ていない。老獪とも言える年頃の真二のである。「お前の姉」という表現で幸子に博の気持ちを告げたのだろうか。

席に戻った幸子は言葉少なになった。訳も分からない罪悪感が襲って来た。友達との受け答えも苦痛になり、早く一人になりたい思いで、閉会するとそそくさと外に出た。

新宿から豊田までは中央線の特別快速で三十分ほどである。座ることの出来た幸子は頭を抱えるようにして博のことを集中的に考えようとした。しかし胸の動悸とともに断片的な記憶が飛び交うばかりであった。

改札口を出ると、外は雨になっていた。幸子は雑然とした自転車の列の中から自分のものを見つけ、バッグをその籠に投げ入れた。うつむいてキーを外す幸子の襟元に俄に雨足が強まった。

驟雨にも幸子は上の空であった。新しいダークローズのブラウスの濡れた袖が腕にへばりついた。しかし感覚を失ったかのように口を結んだ幸子は、只ひたすらペダルを踏んで帰宅を急ぐのだった。

幸子は二晩眠れぬ夜を過ごした。この十五年間というもの、幸子は夫と子供たちを精一杯愛し、自分の可能性を全て捨てて、家族の幸せが自分の夢とばかりにひたすら家事に専念して来た。それが自分の迂闊さのために一人の男を不幸にし、その家族をも失望させることになったのだろうか。幸子は博との思い出を丹念になぞろうと努めた。

幸子は、自分も博に好感を持っていたことは事実だったと思った。博が訪ねて来ると嬉しかったし、何でもよくおしゃべりしたものであった。兄、姉を持たない幸子のよい相談相手であった。物語などの恋愛にあこがれて相手に博を置いてみたこともあったが、しかし幼いそれは恋情というものではなかったと思った。

最後に会ったときは茶の間に炬燵があった。向かい合って座った幸子は、

国語で上田敏の「海潮音」からの詩を教わっている話をしたその中にデカタン詩人ベルレーヌの詩があった。

秋の日の  
ヴィオロンの  
ため息の  
身にしみて  
ひたぶるに  
うら悲し

幸子はこのセンチメンタルな文句が大いに気に入っていた。そんな話をしたあと

「私はきっとデカタンなんだわ」と言った。

「だって私は大雑把な人間なんだもの」

国語の教師は、デカタンの意味する頹廢的で乱れた生活を、当時女学生に説明するのに困惑したのだろう。彼は「細かいことに拘泥しない大雑把な人間ということだ」と説明した。幸子が自分はデカタンだと思った理由はその教師の説明によるものだった。後にそれは意味が違っていることを知って、その会話が忘れられないものとなっていた。

じっと思いを凝らすと、その時の博が笑いもせずじっと幸子を見つめていたことを思い出した。その瞳は何を語ろうとしていたのだろう。幸子は当時の自分の幼稚さを改めて噛みしめた。

二日目の夜になって、疲れた幸子はやっと結論を出した。

（博ちゃんは具体的には一度も私に愛を告げたことはなかった。私が精神的にまだ幼かったことを博ちゃんは知っていた筈だ。是が非でも私を望んでいたのであれば、直接告白すべきではなかったか。私を思い続けていたとしても私の知らないことには、どうすることも出来なかったのは仕方ないことだろう。もし告白されていたとしても、果して承諾しただろうか。たとえ経済的には恵まれたとしても、今のように夫と子供に夢中になって生活することが、博ちゃん相手に出来たかは疑問ではないだろうか。

先生のお話がたとえ一部真実だったとしても、二十年間も私のことを思い詰め続けているなどということは到底信じられない。絶対他にもいろいろ原因がある筈だ。私はそんなに美人でもなければ、とりたてて魅力があるわけでもないし、家事は苦手の欠陥女房である。そんなことを信じること自体がとんでもない思い上がりには違いない。私が罪悪感に苛まれるなんて、かえって滑稽なことではないだろうか）

そう考えた幸子は、ほっとしてやっと博の思い出から抜け出すことが出来た。翌日はよく眠れた。放念ということはこういうことを言うのだなと幸子は思った。そして再び博は意識の底に深く沈んだ。

それからまた二十年が経った。幸子の長男次男長女ともそれぞれ結婚し、五人の孫にも恵まれていた。三男とその後生まれた次女がまだ学生ではあったが、ほぼ巣立ったと言ってよかった。敏彦も前年役職の定年を迎え、子会社の役員になっていた。

初夏のある日、初子が風邪をこじらせ高熱を出して入院したという知らせが郷里の妹から来た。連休に敏夫と東アメリカのツアーから帰って来たばかり

りだった幸子は、慌ててその日の列車に飛び乗った。諏訪に着くと、日脚の長い初夏の残照が、まだ木々の新緑に映えていた。

幸子が駆けつけた時、初子はただ昏睡していた。青豊のような血の気も艶もない顔で、点滴を受けていた。高熱のため意識はなかった。翌日は目を開き、返事はするものの、幸子を認識している様子はなかった。

その一週間後に幸子が病室を訪れた時は、意識は戻っていたものの、まだ点滴は外されていなかった。

二ヵ月ほどして車椅子に腰掛けられるようになり、一度は退院して家に戻った。しかし周囲の人々が驚いたことには、初子は三年前に建て直した自宅が全く判らなくなっていた。この四、五年間の記憶がすっかり抜け落ちてしまっていたのだ。

初子は、ゆっくり回復に向かっているように見えたものの、八十三才という高齢には限界があった。食は細っていたから、ちょっとした熱にもすぐに貧血を起こし入退院を繰り返した。

最初の入院から一年が過ぎ、その夏も終わりに近づいていた。幸子は又入院していた初子を見舞った。

頬の肉がげっそりと削げ、頭蓋骨に皮が張りついているようになった初子の顔も、もう見慣れて驚くこともなかった。幸子はベッドの脇に腰を下ろして初子の手を取った。

二人部屋で、中年の色黒で小太りの女性が同室だった。全く不平不満の固まりのような女で、見舞いに来た夫らしい男にブツクサと文句をつけていた。男が帰ってしまうと今度は「痛い、痛い」と言って看護婦を呼んだ。そして注射をしてもらおうと、その薬が効いたのかその女は眠り込んだ。

幸子はバッグの中から、ある機関紙に頼まれて書いた原稿を取り出した。それは、戦時中から戦後の混乱期の思い出を綴ったものだった。幸子は母のおぼろげになった記憶に語りかけるように、ゆっくりと読んだ。初子は遠い処を見つめるような眼差しで、頷きながら聞いていた。やがて読み終わり、幸子は再び母の手を取った。

しばらく二人は無言で追憶の中にいた。六年間もの淳圓の出征であった。戦後も淳圓の学究では収入の見込みはなく、食べ盛りの子供を抱えて、淳圓ともども初子は悪戦苦闘の連続であった。幸子は長女としてその一端に手を差し延べて来たのだと思う。

俄に窓外が暗くなって来た。夕立である。雨粒の爆ぜるような音を聞きながらじっと沈黙していた初子が突然口を開いた。

「山浦の息子はどうしているだろうね。ほら、医者になるって言っていた。

何て言ったかねえ。もう名前も思い出せなくなってしまったが。よくあなたに本を持って来ておくれだったね」

山浦とは博の実家の辺の総称である。幸子はドキリとした。やはり初子も心の底で博のことを気にしていたのだ。

塚本真二から博の話聞いてからすでに二十年。最後に会ってからは実に四十年にもなっていた。まだ博は独身のままなのだろうか。

「そうね。博ちゃんねえ。どうしているかしら。きっと優しい先生になつてると思うけれど」

真二の言葉に悩んだことなどおくびにも出さずに幸子はつぶやいた。

あの気のよい家族は、それぞれどうしているのだろうか、気掛かりではあ

るが、今更詮索するのはやめておこうと幸子は思った。

幸子ももう六十歳。博も六十五歳になっている筈だ。顔を合わせてもきつと分からないだろう。そしてもし会ってもお互いただ幻滅があるばかりに違いない。

幸子の博は、白緋の浴衣を着て、泉水の降り口の大きな石に立ち、足を洗っている丸刈りの少年である。そうだ。博は幻でよいのだ、永遠に。

驟雨はますます激しく、大粒の水滴が張りついていた窓ガラスを、上から洗うように水が流れて行く。窓外の木々も歪んで動くようにも見える。流れて行く水は二度と戻らず、何処とも知れず去って行くのだ。

閃光がきらめき、遠くに雷鳴が聞こえた。

了